

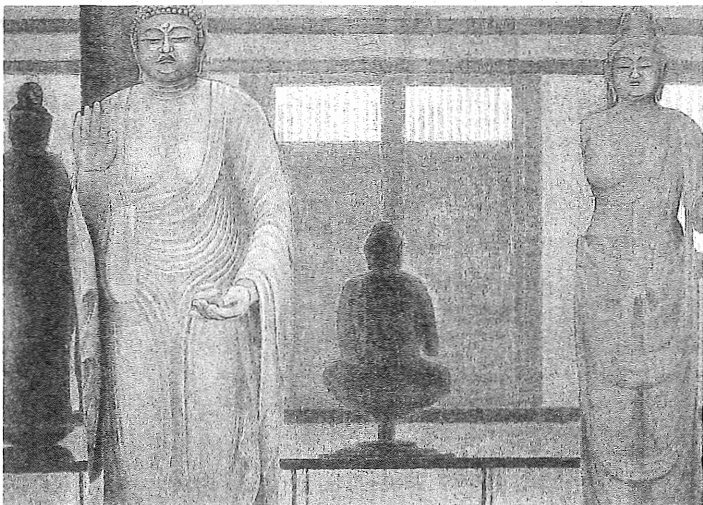
Friday >>> いばらき

自身の思い 仏像に託す



田中嘉三記念館
唐招提寺講堂

笠間市出身の日本画家・田中嘉三(1909～67年)。遺族が建てた記念館では、嘉三の作品約20点のほか、スケッチや道具などが展示されており、日本画に情熱を注



唐招提寺講堂(田中嘉三記念館提供)

ぎ続けた嘉三の生涯を垣間見ることが出来る。作品は仏画が中心で、仏像の端正な表情からは、厳かさが伝わってくる。

嘉三は14歳の頃に、同じ笠間市の日本画家で、仏画を極めていた木村武山(1876～1942年)に弟子入りして腕を磨いた。嘉三が仏画に傾倒したのは武山の影響もあるが、次男で館長の桂二さん(76)は「若い頃に病に倒れたことも大きかった」と指摘する。嘉三は17歳頃に病で、5

年ほど入院した。当時貧しかった嘉三は、担当医師に治療だけでなく、レコードを聴かせてもらったり、本を貸してもらったりするなど何かと気にかけてもらったという。桂二さんによると、嘉三は生前「自分は生かされているんだ」と口癖のように話していたといい、嘉三が仏画にこだわったのは「そういう気持ちがあったからだと思う」とみている。

る。

数ある仏画の中でも目を引くのが「唐招提寺講堂」(1962年)だ。縦150センチ、横210センチの中心に描かれているのは背を向けた小さな仏像。仏像の背中はどこか寂しげで、悩みを抱えているようにも見える。嘉三が普段なかなか見ることができない背中をあえて目立たせたのは「父の心を表したからだ」と桂二さんは説明する。嘉三はこの頃、思い通りの作品が描けず悩んでいたため、その気持ちを仏像に託したという。桂二さんによると嘉三の仏画は「自分の考えや思いを託したものが多く」という。

開館から40年以上たった今も変わらぬまなざしで人々を見つめ続けている仏像たちは、訪れた客から「おだやかな気持ちになれた」と好評だ。新型コロナウイルスの感染拡大で、不安や中傷が絶えない昨今。桂二さんは「仏画を見て心を落ち着かせて、思いやりの心を思い出してほしい」と話している。

(長谷部駿)

△メモ▽ 田中嘉三記念館(笠間市下市毛1-3-77の2、☎0296-72-3309)は、北関東道友部インターチェンジから車で約10分、JR友部駅からはタクシーで約15分。不定休。午前9時から午後5時半まで。入館料は大人300円。